奪ってなお、廻る物語 『逆』

チキン執事

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
奪ってなお、廻る物語　『逆』

【Ｎコード】
Ｎ５３２０Ｚ

【作者名】
チキン執事

【あらすじ】
彼はおかしくはない。ただ、感情が薄いだけで。
彼は壊れてはいない。壊れかけているだけで。
彼は強いわけではない。ただ、そうなっているだけで。
彼は、まともな訳じゃない。そうあろうとしているだけで。

彼は、ノーマルな訳じゃない。アブノーマルな訳じゃない。ましてや過負荷な訳じゃない。

――『逆』なだけで。

母の愛。そして生まれたモノ（前書き）

さぁて、やっちまいましたノリ投稿。

フッとね？考え付いちゃったんですよ。

まぁ気が向いたら読んでくださいこの駄作！

名前が厨2臭いのは気にしないで下さい！

では、どうぞ！

母の愛。そして生まれたモノ

彼は、昔から引っ込み事案だった。

まぁ家から一度も出たことのない彼からしたらどうでもよいことなのだが。

きっと何を言われても渡して、普通の子供のように何かが欲しい何てきっと言わないだろう。

でも、

彼にも欲しいものが一つだけあった。

母の愛。

ただ、それが、それだけが。

でも、彼はそれを貰えなかった。

何故なら

彼の母は、一人の男に愛を、全てを捧げていたから。

彼の母――彼女はその男に騙されている事を承知で、愛していた。

金を貢ぐために身体を売って。彼と共に薬に溺れて。

いつまでも、彼女は狂っていながら愛していた。

そして、その歪んだ愛の塊――彼が生まれた。

なのに、貰えたのは『痛み』だけだった。

薬のせいでガリガリ痩せ細り、呂律もまともに回らないで、見た目はそんなのなのに。

彼はそれすらも愛した。

母から来るものは何でも愛した。

痛み、苦しみ、熱さ、罵り――受け入れた。

廻って、痛んで、廻って、痛んで、廻って。

そして、変わった。

ついに、変わったのだ。

彼が恋してやまなかった、生まれながにしてずっと待っていたもの。

母の愛。

薬のせいで禁断症状の時は沢山嫌な思いをしたが、薬を打った後は『母親』だった。

優しく抱き寄せてくれる大きな腕。優しい声色。

全てが自分のものになった。

だから、全てが壊れた。

グッチャグッチャグッチャ。

鈍く輝く何がが母の身体を何度も突き刺すような、そのたびに瑞々しくなっていく音。

ゴギン。

優しく、暖かかった母の腕から鳴る鈍い音。

ァ……ゲァ……カァ？

あの優しかった母の喉から聞こえた母のものとは信じたく無いほどの醜い声。

「あひゃ……へへへ……あぁぁぁぁはははははははは！！お前がァ！！……お前が悪いんだぁ！！お前が奪ったからこうなったんだぁ」

狂ったように笑った後、男はそう言った。

奪った？ウバッタ？何を？母を？僕が？何が？

頭が、真っ白に為る。

もう無いのだ。

温かさが。

母『だったもの』に触れた。

違う。暖かくない。

腕が違う、からだが違う目が違う色が違う。

ただ、未だ溢れ出る赤い液体が生暖かかった。

男が、先程の母を違うものに変えた鈍く輝く何かを、自分に向けて振りかぶって、終わった。

ドドドドド。

何ががが、入ってきたのだ。

ドドドドド。

足音が重なる。

ドドドドド。

黒服の人達が男を取り囲んだ。

「警察だ！動くな！」

黒服が何かを言っているが、まるで遠くに居るかのように聞こえた。

ギュウ。

何かが体に絡み付く。

見ると、黒い人が自分に絡み付いていた。

そこにあったのは、熱。

暖かさではない、熱。

少し似ていたが、少し違った。

ただ、うろ覚えだからあまり覚えてないけど、

「君は……私が護るよ……」

この言葉だけは、覚えている。

そして熱が、少し冷めて暖かくなった。

あぁ始まる。

終わったのに、また始まる。

廻る。

これは全てを奪ってしまう少年の、少し暖かな物語。

始まるのだ。

奪わない為の、物語が。

母の愛。そして生まれたモノ（後書き）

そしてめだか達の参戦は未だない。

まぁ、気長にいきましょう。行かせてください。

では、今日はこの辺で。

誕生。そして始まり（前書き）

第二話投下です。

どうなるんでしょうね、これから。

私にも分かりません。

何故ならまだ名前すら決めてないから！（ヲイ

誕生。そして始まり

それから三年。

僕は『生きていた』

異常な現象を回りに起こしながら。

僕はあのとき一人の警察――今の父に当たるわけだがその父に拾われ、裕福でもなく貧乏ななけでもない、しかし満足のいく生活を送っていた。

思えばいつからだっただろう。

周りのモノを奪ってしまっているのは。

小学二年生、いつものように授業を始めようとすると、一人の男子が手を上げた。

どうやら筆箱が無くなってしまったらしい。

僕は別に嫌われている、なんてのがなかったから普通に手伝った。

そして、見つかった。

僕の机のなかから。

最初はいたずらだと思った。

でも、だんだんとそれは悪化していきもうこれは誰が見ても異常と思えるほどになっていき、ついに父は僕に病院へ行こう、そう言った。

――●●●みたいな不思議な力を持ってるかもしれない子供たちが集まった病院なんだぞ？仲良くな。

父さんはそう言った。

僕の頭をわしゃわしゃと力強く撫で、笑った。

――ちっとも嬉しくなさそうな顔で。

僕はそんな父さんの顔を見たことがなくて、知らなくて怖かった。

だから、父さんの言うことはなんでも聞いた。

そして、父さんの運転する車に揺られ、ようやくその病院にたどり着いた。

中に居たのは、子供。

でも違う。

明らかに――異質。

雰囲気が、オーラが、見た目が。

――ほらほら、ちゃんと皆に挨拶をするんだぞ？じゃ、父さん、ちょっとお医者さんと話してくるから、ちゃんと待ってろよ？

うん、分かったよ父さん。挨拶もするしちゃんと待ってるよ。

父さんはそれを聞くと向こう側に歩き出す。

そして僕も言われたことを護るため行動に移した。

「こんにちは、皆さん。僕の名前は◆◆、●●●。みんなの名前は？」

すると周りから色々な声が飛んでくる。

「――」「――」「――」「――」

「へぇ、そういう名前なんだぁ。うん。みんな宜しく！」

そう言うと、飛び交う雑音の中にそれに混じらない言葉が溢れた。

「――下らない」

そちらを向くと、一人のおかっぱの女の子が居た。

「……。どうして？」

僕はたまらず、そう聞いた。

別に放っておいても良かった。でも、見るに耐えなかった。

目が。

まるで全てを諦めるかのような、突き放すような、無意味なような
そんな目。

「そうだろ？私だって、貴様だって。無意味に生まれて無関係に生
きて無価値に死ぬに決まっているのだ」

――正直、その言葉は響くものがあった。

無意味に生まれて無関係に生きて無価値に死ぬ。

心に響いた。

でも違う。

「それは少し違うんじゃないかな？えーっと……」

「黒神、めだかだ」

「……じゃあめだかちゃん？」

「その呼び方止めろ」

えーー。と内心ため息をつく。

「じゃあめだかちゃんさんで」

「……もういい」

「うん。じゃあ話を戻すね。めだかちゃんさん。『無意味に生まれ
て無関係に生きて無価値に死ぬ』僕も胸を打たれたよ。多分……あ

のままだったらきっと僕もそう思った」

「……あのまま？」

「うん。めだかちゃんさんはさ、きっとまだ『産まれてないんだよ』」

それを言うと、めだかちゃんさんは『は？』と言う顔をした。

「私は生まれているぞ。現にここに……」

「じゃあしたいことはある？」

「……ない」

「ほらね？……じゃあそこから始めてみなよ」

「……始める、だと？何を？どうやって？」

「始めるんだよ。めだかちゃんさんを。最初っから」

手を、差し伸べる。

めだかちゃんさんはひとしきり悩んだ後、手をとった。

「――――ちゃーん。三番の検査室に入ってくれるー？」

看護婦さんの声が聞こえて、また居なくなる。

僕はソレを見計らって、扉に近づいた。

見るからに鍵が掛かってますよと言いたげな扉。
扉の取っ手を右に回す。
ガチャン。
手に伝わる鍵のかかった感覚と音。
はぁ、やっぱりあかないよな〜。
「――何をしている？」
そんなとき、めだかちゃんさんの声が聞こえた。
「うん。ちょっとね、ここ出たいな、何て」
無理だよね。と言おうとしたときだった。
ガチャガチャ……カチン。
ものの三秒弱。扉が開いた。
「開いたぞ、扉」
さも当たり前のように針金で扉を開き、こちらを向いた。
「――――良い大人にならないねって言おうと思ったけどめだかちゃんさんナイスかも！」

そして彼女の手をとり、走り出した。

「え？なっ！？き、貴様！どこにつれていく！」

「知らない」

キッパリと言ってやる。

「――僕も知らないような場所にだよ」

後ろから慌てた看護師の声やお医者さんの声が聞こえる。

でも気にしない。

走る、走る、走る。んで、疲れる。

「め、めだかちゃんさん？このままは、走ってくれる？ぼ、僕もう疲れ――」

「きっ！貴様！自分から連れ出しておいてそれか！ってまてまてまて！！分かった！倒れるな、ほら！掴まれ！」

思えば二才で同い年の女の子の背に揺られる。何て珍しい体験だろう。

「……ふぅ。疲れた。じゃあめだかちゃんさん号出っ発ー！」

「調子に乗るなぁぁぁぁぁ！！」

十分後。

たどり着いたのは漢字がめんどくさくて読めな――「託児所だ」……らしい。

どうやらここは子供を預けるような場所らしくて、ここには一人の男の子が居た。

カチャカチャ、カチャカチャ。

男の子が指で弄るぐにゃぐにゃした物が、音をならす。

「うーん。ここはこう？……うえ？違う……あ、こっち！……違う」

見ている僕らは助けたくてうずうずしてどうしようもない。

「――あぁ！もう！」

そんな声が隣から聞こえた。

ずかずかと、男の子の方へいくめだかちゃんさん。

「おい、そんな簡単なパズルにどうして戸惑っている？貸せ。私がやってやる」

そう言って彼女はパズルをとり、一瞬で解いた。

「ほら、解けたぞ」

ぽいっと投げ渡す。

それを見た男の子は

「うわぁ！凄いや！どうやっても解けなかったのに！ありがとう！すっごく嬉しいよ！」

「……礼には及ばない。私にとっては取るに足らないことだ」

「じゃあさじゃあさ！これも解いてよ！」

男の子がそう言うとめだかちゃんさんはそれを受け取り素直に単純に当たり前に解いていく。

うわぁ……本当に凄いや。何てこんなに解けるの？だって明らかにこれ――。

異常じゃん。

「うわあぁぁ！本当に全部解いちゃった！すごいすごいすごい！君はすっごくすごいや！」

「……凄くなんかない。それに凄くたって何にもならない。私が生きてることに、私が生まれたことに、なんの意味もないのだから」

「えー？そうかなぁー？この世に意味のない事なんてないと思うけど？」

「……。だったら私に教えるがよい。私は何のために生まれてきた？」

「あはっ！そんなことは簡単だよ！会ったばかりの僕をこんな嬉し

い気持ちにしてくれた君なんだ――」

そして、言った。

人生が、変わる一言を。

「君はきっと、みんなを幸せにする為に生まれてきたんだよ！」

「私が？人を幸せに？」

「うん！そうだよ！」

「……出来るのか？」

「「出来るよ」」

男の子と僕の声が重なる。

「実はね……僕、今までこんな話せなかったんだ。怖くて、でもね……めだかちゃんさんと今こうやって話せるのは、めだかちゃんさん、きみのお陰だよ」

「……む」

「君はもう、こんなに僕を幸せにしてくれたんだ。だから、もし、君がそれを望むのなら、僕はそれのお手伝いをしたい」

「……わかった」

そして、目が変わった。

めだかちゃんさんの目があの光を称えていない目に、光が灯った。

そして、

「私は決めたぞ！私はこれから――」

多分これが、この瞬間が――。

「人を助けるために生きるッ！」

『黒神めだか』の誕生だろう。

誕生。そして始まり（後書き）

とりあえずめだかちゃんになったところから始めてみました。

次の次当たりから時間軸がすごいことになりますのでご了承を。

そしてご感想、こうしたほうかよくね？とかじゃんじゃん宜しくです。

あ、訂正案もお願いします！

少年、驚嘆。そして不幸（前書き）

よし、授業中に投稿できた！

なんか主人公のキャラがぶれまくります！

少年、驚嘆。そして不幸

チュンチュン。

窓からは、小鳥の鳴き声。

僕は布団から体を起こして、欠伸――をしたいところだけど開口一番に言いたい、否、言わなければならない事があった。

「ここどこさぁぁぁぁ！？」

そうなのである、あまりにもビックリ過ぎてなんも言えなくなりそうだった。

でも、何でこうなったか。理由は分かった。

それは簡単、隣でどこぞのおかっぱ娘が寝ていたからだ。

おもむろに布団をひっぺがし覚醒を促す。

「う……ん？ふぁぁぁ……。ようやく起きたか、遅いぞ」

「遅いぞ、じゃねぇよ」

思わず口調も変わる。

「おかしいよね！？どうなったの僕！拉致！？テレビでよくやってるあれなのこれ！？」

「安心しろ」

めだかちゃんさんの、真っ直ぐな言葉。

思わず全てを委ねてしまうような、そんな安心感に満ちた目。

彼女は言う。

「拉致したのは私――イダダダ！！ひょひょをひっぴゃりゅな！（頬を引っ張るな）」

仕方ないよね？思わずやっちゃうよね？

そろそろ涙目になってきたので手を離す。

「うぅぅ……痛い。と、とにかくだ。そろそろつく。準備をしろ」

そろそろつく。準備をしろ？

何をいってるんだろうね、この人は。

一応だが、一応どこに行くか聞いてみると

「私の家に決まっているだろう？」

なんて……はぁぁぁぁぁ！？

「ちょっとなんでさ！まず僕は君のことすらよく知らないのにどうして！？」

「はぁ？何をいっているのだ貴様は」

やれやれと言いたげな顔をして、ため息をつく。

「貴様は私を助けるのであろう？昨日そう言ったよな？なら、私も貴様のことを知る必要があるし、貴様も私のことを知る必要があるのだ！つまり、今日から我々は友達だ！」

凛ッ！！そんな効果音？を出しながらめだかちゃんさんは言った。

友達……か。

「それならこっちもそれ相応の対応をとらないとダメだね。うん。じゃあ宜しく、僕の始めての友達」

それを言うとめだかちゃんさんの顔はパァァァと笑顔になり、

「よろしくっ」

抱きついてきた。

「め、めだかちゃんさん！？ちょっ！くっつきすぎ！やめてやめ……ギャ！それ極ってる！なんか…アダダダダ！ギブ！ギブ！」

～三分後～

「はぁ…はぁ…死ぬかと思った」

「む、どうした？そんな死にそうな顔して」

「……」

とても殴りたい気持ちに苛まれたが、ここは我慢。それより……。

「ねぇめだかちゃんさん。僕、着替えたいんだけど服ない？」

「ふっ。めだかちゃんを見くびるな。ほらこの通り」

めだかちゃんは指をパチンと鳴らすと後ろのカーテンがシャー、とスライドし後ろには男の子用の服がびっしりと。

「ありがとね、めだかちゃんさん。じゃ、着替えるから後ろ向いてて」

しかし、めだかちゃんさんは全く微動だにしないで僕の方を見ている。

「め、めだかちゃんさん？」

「フッフッフ。何をいっているのかな。私が服をこんなに揃えた理由を知らないのか？」

ニィ、と笑い指をわきわきさせ始める。

「ね、ねぇお願いめだかちゃんさん。普通に、普通に着替えさせてください！」

全力で言った。何かが、来る。

得たいの知れない恐怖が身を襲う。

そして、めだかちゃんさんが言った言葉は

「――さぁ、脱ぎ脱ぎしようか」

死刑宣告だった。

「キャァァァァ！！」

ここからどうなったかは、言うまい。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「「「お帰りなさいませ」」」

これが、リムジンからおりて初めて聞いた言葉だった。

うわ……メイドさんなんて実在したんだ。

これが僕の最初に抱いた感想。

「ほら、入るぞ」

そんな僕の初めての体験に浸ってるにも拘らずそれをぶち壊し、僕の腕を掴み中まで連れていかれた。

随分と長い廊下や階段を上りきった後、待っていたのはひとつの部屋だった。

扉を開くとそこにあったのは刀、変な形をした剣、様々な賞状の数々、そして目を見張るものは

「こ、これ……全部本？」

そう、壁と言う壁、全てにそれらがびっしりと詰まって居たのだ。

「うむ、そうだ。そしてこれが私の部屋だ！どうだ！」

へへん、と胸を張ってそういうめだかちゃんさん。

「どうって言われても……」

「わぁ！！昨日の人だぁ！」

突如、背中に衝撃が走る。

僕はめだかちゃんさんと違って背が低いわけで、育ってないわけだから、衝撃が来ると当然痛いし、

「へぶっ！？」

――吹っ飛ぶ。

あまりの痛みに涙が出た。と言うか大声で泣いた。

そしてひとしきり泣いた後、さっきの痛みの元を見るとそこに居たのは昨日の男の子だった。

「あははは。ごめんね？痛かった？」

男の子は笑いながらちゃんと謝ると言う高等技術を見せてくれた後、僕に自己紹介をしてくれた。

「僕はね？ひとよし、ひとよしぜんきちって言うんだ！宜しくね！君は？」

そういわれて僕は。

「えーーー？さっき僕を痛い目にあわせた子に名前なんて教えたくなぁーい！」

――多分、子供ながらの冗談だったんだろう。今は何でこんなことをしたか分からない。

「えーーー。酷いよぉ。謝ったよさっき！」

「ふふ。謝って許すなら警察なんて要らない！」

だけど僕は、俺はこのときのこの言葉をこの後悔やむことになる。

――高校生になるまで。

結局、名前は教えなかった。

だけどそれでも充分に遊べたし楽しかったから、名前の事なんて忘れてた。

だから、時間もすぐに過ぎていった。

「ねぇねぇめだかちゃんさん。トイレってどこ？僕トイレに行きたいんだけどな」

「ん？そうか。わかった。では言うぞ。ここの部屋を出てから右に五メートル。前に七メートル、そしてそこに見える階段の……」

「ごめん無理。いいや、ここは僕の勘をたよりにすればたどり着けるような気がしてきたよ」

「むぅ……そうか。では行ってこい」

はぁーい。なんて軽い声を出して扉をあけ、閉めて、歩いて――迷った。

ただ、目の前にあるのはこんな大きなお屋敷にあるとは思えないほどのボロボロの扉。

だけど、僕はそんなの気にせず入った。

するとそこにはひとつの部屋があった。

いや、これは部屋と言っていいのか？

周りを見ると壁には――否、壁は本によって全く見えない。そして床には何かがびっしりと書き込まれた紙、そして唯一、ここを部屋だと認識させてくれる物の机には

ガリガリガリガリガリガリ。

女の子が居た。

彼女は僕が居ることにも気付かないくらいに一心不乱になにかに熱中し、何かを求めていた。

「駄目だ……駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ！これも違う！何なんだ！まだオレは『不幸』じゃないのか！！」

急に大声を出されたせいでビックリして、尻餅をつく。

カサリ。

そのせいで床の紙が潰れて、音を鳴らした。

ピクリ、今度こそ彼女は僕の存在に気が付き、視線をこちらに向けた。

「誰だてめぇ……」

「わ、喋った」

「喋るよ。いや、そんなことはどうでもいい。おい、なんでこんなところにきたかってんだよ」

「迷ったから」

僕がそうきっぱりと言い張ると彼女は大きなため息をついて再び机に向かった。

ガリガリガリガリ。と彼女が筆を走らせる音だけが部屋を支配する。

う〜ん。せっかく会ったんだし話をしたいな……よし。

「ねぇねぇ」

ガリガリガリガリガリガリガリ。

「ねねねねねね」

ガリガリガリガリガリガリ！。

「おや？聞こえてないのかな？オーイ」

ベキンッ！！

「だから何なんだよ！うるさいから出てけ！」

「ほら、そんな大きな声を出さないで」

「出させてんのは誰だよ！」

「え？僕？」

首をかしげてそう聞くと彼女はまたふかいため息をついた。

「……はぁ。んで何なんだよアンタは」

「え？僕？僕は●●◆◆◆だよ。じゃあ君は？」

「オレか？オレは黒神、黒神くじらだ」

「黒神？ってことは君はめだかちゃんさんの家族の人？」

「めだかちゃんさん？……あぁ、めだかのことか。そうだよ。あの――『恵まれもの』の姉だ」

「恵まれ者？」

僕はこの言葉が頭に引っ掛かり、聞き返した。

「恵まれ者、いや、少し語弊があるか。違う、正確には『恵まれ過ぎた者』か」

ますます分からなくなる。

しかし僕が話に追い付けてないにもかかわらず彼女は話を続けた。

「あいつは天才だ。あいつは天災だ。生まれもって化け物の素質を持ち。生まれもって全てが全てを上回ってた」

だから――。彼女はそう一言おいて。

バキィ！

机を粉砕した。

「だから俺は『不幸』（かわいそう）になってあいつより天才になるんだ……！」

「可哀想になったら天才になれるの？」

「ああ？なれるに決まってるだろ？今までの偉人達だって色々な劣悪な環境で育って皆偉人になってきたんだ！だからオレも……！」

「違うよ」

僕は言った。彼女の言葉を否定するために。

「違う……だと？」

「うん、違うよきっと」

後押しするようにそう告げると、彼女は僕の胸ぐらを掴み、壁に押し当てた。

「お前に何がわかる！オレの気持ちなんてお前に分かるか！！」

「分かりたくもないよそんな気持ち。ただの自己満足じゃん」

力が、さらに込められる。

「あのさ、僕はね、こう思うんだ。そんな事するくらいなら普通に勉強しろー。ってね」

「だってさ、そうじゃない？めだかちゃんさんの家はこんな豪華なんだしいくら君が『不幸ごっこ』をしようと最終的には助けられちゃうんだよ？それに皆だって心配してるんじゃない？」

それを言うと、くじらちゃんさんは息を飲んだ。

「気付いてはいるんだよね。分かりたくないだけで。分かるよ、そ

の気持ちは」

「なっ！て、テメェ！」

「まぁまぁそんな怒んないで。とにかくたまには皆と仲良くしてみれば？その様子からするとまともに食べてもないんでしょ？」

「だから関係ないだろ！さっきから何なんだ！なんのためにここにいる！」

「あ！うん。そうだった。ごめんね～。勉強の邪魔して。それじゃあ程ほどに頑張ってー。僕はそろそろいくよ」

そう言って扉を開き、外に出た。

留まる事を知らない憤りが胸を支配したままのくじらは。

「何なんだ、あいつは……」

ただ、壁に向かってそう呟くことしかできなかった。

オマケ☆

「うぅ……こ、怖かった……」

当たり前だ。壁に押し付けられ鬼の形相でこちらをにらんできたの

だから。

「それにしても黒神家の皆は本当に変わってるなぁ」

しみじみと呟いてまた、来た道を戻ろうとする。

———その時だった。

ブルリ。

下半身から鳥肌が立つように、そしてある感情をよりいっそう高める感覚が、体を巡る。

「と、トイレ！！」

……尿意だ。

これ以上は主人公の為、多くは語らない。

ただ、これは未来永劫、彼の心の中に傷としてのこるであろう。

少年、驚嘆。そして不幸（後書き）

こっからどうやって箱庭まで持ち込もうかな。

主人公についてはどうしようかな。

悩むところがまだまだありますが宜しくお願いします！

来たのは別れ。そして違和感（前書き）

メリークリスマス。

来年も元気にシングルヘル！

皆も一緒に頑張ろうね！

来たのは別れ。そして違和感

あれから、二年たった。

今僕は四歳。

めだかちゃんさん達とは家がかなり離れているため学校は違うけど半月に一度は必ず遊ぶくらいはしてるよ。

しかもね、あれから遊ぶ所にたびたびくじらちゃんさんが現れることになったんだ、くじらちゃんさんの言い分では『ふん、オマエがそう言うならその案試してやるよ』だって。

そしてめだかちゃんさんにはお兄さんも居た。

名前は黒神まぐろさん。

え？さん付けないのって？だってこれでつけたら『さんさん』になっちゃうし、まぐろさんは年上で男の人だから『ちゃん』は変でしょ？

まぐろさんは若干凹んでたけどこればっかりは仕方ないよね。

そして善吉ちゃんも善吉ちゃん。彼は今のところ変わったところはないけどめだかちゃんさんと一緒にいたら間違いなく変な方向に進むこと間違いなしだね。

そして今、こんな感じで読者の皆さんに空白の二年をバッサリ伝えたんだけど、これがなんと最悪な事に、

「て、転勤！？父さん！ソレ本当！？」

「……うん、悪いな本当に。いやー。あの時父さんが凶悪犯を捕まえちゃったばっかりに！！でも父さん凄かったんだぞ～？●●にも見ていて欲しかったなぁ～」

こんなことに為りました。

しょぼんとした顔をしたあとすぐに元気な顔になりカラカラと笑い出す父。

全く、ひょうじょう豊かだよなぁ本当に。

まぁなんて感じでせっかく最初に出来た友達のめだかちゃんさんやまぐろさんや善吉ちゃんさんやくじらちゃんさんと離れ離れに……嫌だ！

「ね、ねぇ父さん！どうしても駄目なの！？行かないと駄目なの！？」

切羽詰まった様子で父に詰め寄ると父さんは少し困ったような顔をした。

「うーん。出来ないわけではないんだがなぁ……。なぁ●●、お前父さん居なくても生きていけるか？」

それは、酷く現実味を帯びた問題だった。

確かに、こちらにはこちらの、あちらにはあちらの理由があるのだ。どちらもそうは簡単に譲れないだろう。

しかし、だ。いくら自分の精神的年齢や考えが年相応の物ではないからと言って、これから生きていくには『父』という存在が不可欠といってもいいほど大切だ。

そうなると、出る答えは決まってくる。

「だよね……うん、分かったよ、父さん。ごめんね？こんな我が儘言っちゃって」

「いいや、悪いのは父さんだ。せっかく●●が変われるようないい友達を持ったのにな……我が儘言わせてやれなくてごめんな……」

そんな、『こんな僕』を拾ってくれただけでも充分だよ。

と、言いそうになったが何故か口から出せなくて、喉まででかかったがその言葉をのみこんだ。

分からなかったけど、無意識に。

「それじゃあ……僕、めだかちゃんさん達に言ってくるよ」

そう言って部屋から出ると父さんが後を追ってきた。

「それじゃあ父さんが黒神さんの家の前まで送ってくよ」

少し申し訳なさそうな顔をして、笑う。

「んじゃあ、お願い」

僕はそれに申し訳なさそうな顔をして、笑った。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

～黒神家～

リンゴーン♪

他の家とはまるで違ったピンポンの音が鳴る。あれ？この場合リンゴンって呼んだ方がいいのかな？

そんなことを考えてる間に僕の前には大きな黒い服を着た男の人が立っていた。

男の人はゴゴゴゴ……！と言う効果音が聞こえそうなほど厳つい顔で僕をひとしきり睨んだ後、

「あぁ、あなた様御座いましたか」

と、急に表情を柔らかくして、門を開けてくれた。

この人は弥生さん。と、言うらしい。

名前を本人に聞いたことは無いが弥生さんが「弥生、とお呼びくださいませ」と言ってきたので僕は弥生さんと呼んでいる。

この人はめだかちゃんさんの家の執事さんで、この家の使用人さんたちの中でも一番偉いんだって、凄いよね。

「ねぇ弥生さん。いっつも思うけどどうしてそんな顔が怖いの？そ

んな大人でもビビるような顔してたら一生結婚できないよ？」

そして、先程も軽く解説したけど何せこの人、弥生さんは顔が怖い。まず、初老という段階だってとうに越えているはずなのにその燕尾服の上からしっかりと筋肉のラインを見せつけるかのように浮かび上がったソレ。

話すと優しいということがわかるが、話さないでいるとまるで鬼か何かと勘違いするほど強面なその顔。

そんな弥生さんは実は結構抜けた人で、こういう話をしていると――。

「ふぅむ、やはりそうなのでしょうか？この顔を直すとなると大変な努力が……。やはり顔を一回燃やして皮膚を……」

「ストップ。何でもないよ弥生さん。てかやめてね？そんな猟奇的弥生さんを見たくないから」

――なんて百歩譲ってもお茶目では無いけど中々お茶目な答え方をする。

分かりました、と相槌を打ちつつも扉の前にたどり着き弥生さんが扉を開けてくれる。

『いらっしゃいませ！！！』

やはりいつものように迎えてくれたのはこのメイドさん方。

うん、いつみても見慣れないなぁ。

「さ、御上がりくださいませ。めだか様ならいつもの場所におられます」

いつもの場所、ね。

僕は不敵にフッ、と笑い弥生さんに向けていい放つ。

「ねぇ弥生さん。――――いつもの場所って何処？」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

～黒神家書庫～

「と、言うことでやって参りました、私です」

「……何壁に向かって話してるのだ……？」

「いや、ただの報告だよ」

「？？？……まぁいい」

あ、呆れられた。

「で、めだかちゃんさんはここで何しているの？」

「うん？私か？本を読み漁っているだけだ」

「へぇ～どんな本？」

「見るか？」

めだかちゃんさんの好意に甘え横から本を覗きこむが……。

……。

「ねぇめだかちゃんさん。これ何語？」

「うむ、これはメソポタミア文明の……」

「……もう僕はなにも言わない。言わないぞ！」

「まあ、お前には分からないものだ」

「じゃあ最初っから見せないでよ！」

相変わらず突っ込みとボケが安定しないこの二人である。

「はぁ……まぁいいや。今日はね、めだかちゃんさんに伝えたいことがあるんだ」

「伝えたいこと……？なんだ、言ってみろ」

「うん、実はね――」

コンコン。

僕が引っ越す事を伝えようとした瞬間部屋にノックの音が響く。

「入れ」

「失礼します。お嬢様、永坂様からお電話が来ております」

「またあいつか……どうせあの数式についてだろう？」

そうめだかちゃんさんが言うと燕尾服を着た人が苦い顔をする。どうやら当たっているようだ。

「まぁいい。どうせすぐに解けるだろうし隼町、先にいってその数式のコピーを貰ってこい」

「かしこまりました、お嬢様」

そう言うと、めだかちゃんさんは一度だけこちらを振り向き、

「それで――何だったか？状況は見ての通りだ。早く手短に頼むぞ」

「あー……えっとぉ……」

なんか、いつもと少し違うめだかちゃんさんの返答に少しだけ戸惑う僕。

「ん？無いなら先にいくぞ？ではな」

「あっ……」

言いたいことを伝える間もなく、出ていってしまう。

あ……ま、いっか。大丈夫だよね、まだ時間はある……はず。

僕はたった一人で書庫に居てもなにも楽しい事はないので、弥生さんの車に乗って家に帰ることになった。

それにしても、めだかちゃんさんどうしたんだろ？

～めだかｓｉｄｅ～

な、なんなんだアイツは。

いきなりあんな顔をされたらどんな反応したらいいか分からなくて出てきてしまったではないか。

全く。

それにしても、アイツは一体なんの話をしたかったのだ？

来たのは別れ。そして違和感（後書き）

それでは皆さん、多分次投稿は来年です！

それでは良いお年を。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5320z/

奪ってなお、廻る物語 『逆』

2011年12月25日12時47分発行